

生まれてからこのかた、肉親とともに味わってきた温かい慈愛は、ひとたび家を離れたがさいご、もう二度と帰ってはこないでしょう。そうおもうと出発までの残り少い月日が限りなく惜しまれるのでした。そんな気持ちが母にひびいてか、私の入院がきまりましたから、母は忙しい時間をさいては、くさぐさのことをきかせてくださって、つとめて私との時間をもとうとするようでした。強いて気持をひきたててくれようとするのでしょうか。母のすすめで、昔ならつた松竹梅や八代獅子、茶音頭など、母の地唄に合わせて、オルガンに向つたものの、足はもうペダルもふめなくなっていて、私は自分の病のふかさに、かえって悲しみがつのってくるのでした。

十二月になって、いよいよ家とも別れる日がまいりました。その前夜、伯父、伯母をはじめ従兄たちまでが、送別会をしようといつて集まってまいりました。私はまずいながら別れの詩を作り、「仰げば尊し」の曲にあわせて、みなに唄ってもらいました。オルガンを弾く人は少し弾きかけると泣けてしまつて何度もはじめからくりかえすようなことでしたが、とうとう次郎が終りまで弾きました。しかし一座は泣くばかりで歌声とはならず、次郎の弾くオルガンの音だけが残りしました。

その夜は午前二時まで語りあかして、大勢のものもまどろむ暇がありませんでした。そして懐かしいわが家の敷居をほの暗い灯にまたいで出ましたのは、一番電車で人目につかないようにとの計らいからでした。私は門へ出てからわが家の二階をふり仰ぎ、いくどか見まわして、これが一生の見おさめかと、後ろ髪を引かれる思いで、みなとつれだつて梅田駅へ俵をいそがせました。

駅前の宿屋に一同小憩して、十一時前の汽車に乗るまで、みなは名残りを惜んでくれました。汽車がプラットホームを離れるとき、弟の嫁になると決まつて破談になつたヨウちゃんが、汽車にそつてホームの端まで走つて来てくれました。ヨウちゃんの手にした白いハンカチーフが、見えなくなるまで立ちつくしてくれていた姿が、いまでも私の臉に浮かんできます。